RPレビュー 2004 No.2 Volume 13

CONTENTS

〈特集〉
地方中小都市活性化の「人的側面」を考える

巻　頭

『地方中小都市活性化に欠かせない人の力』　法政大学 名誉教授　田村　明 …… 2

座談会

『地方中小都市における人的資源活性化の可能性』
福島学院大学 学長　下平尾　勲 …… 4
元千葉大学 教授
現NPO法人まちの縁側育くみ隊
代表理事　延藤　安弘
(司会)日本政策投資銀行
地域政策研究センター 室長　増田　真作

論　文

『地域活性化と地方自治』　東京都立大学 教授　名和田 是彦 …… 14

『地域産業の活性化に寄与する地域中小企業』　福井県立大学 教授　加藤　秀雄 …… 21

『地域のために活躍する人づくり・教育 ～デンマークの人格教育に学ぶ～』　東海大学 教授　難波　克彰 …… 27

レポート

『市民の様々な「思い」を実現するNPO活動 ～市民の自己実現から地域の再生に向けて～』
日本政策投資銀行 地域政策研究センター
主任研究員　阿部　欣司 …… 33

『社会人のMOT(技術経営)教育を進めるシュタインバイス大学 ～驚愕の座学・実践デュアル教育システム～』
日本政策投資銀行 地域政策研究センター
参事役　山口　泰久 …… 38

『市町村合併とコミュニティ開発』
日本政策投資銀行 地域政策研究センター
主任研究員　野口　秀行 …… 42

連　載

〈地域政策論講義(第11回)〉
「地方経済の活性化と事業目的別歳入債」　慶應義塾大学 教授　吉野　直行 …… 48

〈地域政策論講義(第12回)〉
「都市コミュニティ論」　東京都立大学 助教授　玉野　和志 …… 56

〈地域シンクタンク紹介〉
「財団法人 環日本海経済研究所
(ERINA: Economic Research Institute for Northeast Asia)」 …… 61

「地方中小都市活性化に欠かせない人の力」

法政大学　名誉教授　田村　明

生き生きした個性的・魅力的な「まち」には、必ず、まちを愛し、まちの良さを発見し、これを育てている人々がいる。逆に、どんなに、資源に恵まれ、お金をつぎ込んでも、こうした人がいなければ、資源も金も生かされない。形ばかりが整っても、継続的にまちをよくしてゆく力がなく、なにか活気がない。評判になっているまちを見るときに、モノを見ただけでは本当のことは分からない。まちを生き生きさせた人々を発見し話しを聞くことが大事だ。

大都市ではシクミが複雑で、人の存在がみえにくいが、小さな町では人が力を発揮できる。その立場は首長、自治体職員、一般市民とさまざまだ。これから中小都市の活性化に、こうした人々の活躍が欠かせない。

「まちづくり」は「人づくり」だといわれる。よいまちづくりによって人が育つということだし、逆によい人づくりがされていなければ、よい「まちづくり」も始まらないということである。

こういう人々が登場するのは地域に問題がおきたときが多い。柳川の掘割を救った広松伝は、掘割を埋める担当係長に任命されたことがキッカケだった。彼は埋立てを止め清流を取り戻すように市長に直訴した。このことがなければ、広松は小さな市役所の職員として地味な一生を送っていただろう。湯布院のまちづくりで著名になった中谷健太郎、溝口薫平は旅館の経営者だが、その活動は大手資本による高原開発への反対運動から始まり、まちづくりへと展開した。愛媛県五十崎町の亀岡徹は酒造業が本業だが、まちをなんとかしたいという思いで塾をつくっていた。そこに町を流れる小田川をブロック張りにする工事が上流で始まり、危機を感じた。スイスまで河川を視察に行き、近自然工法を提案する。自然にあるものと思っていた小樽運河が埋め立てられ産業道路になるという計画を聞き、峰山富美は運河に思いを寄せ、当局に立ち向かうリーダーになった。事件がおきなければ、好きな小樽で静かな余生を送っていたはずだ。

ここに挙げたものはすでに著名な事例である。いずれも、特定の人物が事態を重く見て、体を張って運動した。その結果、まちには活力が蘇ってきた。これらの人々に共通していることは、本人たちが地域を深く愛していたことだ。流れに逆らえないとか、大きなものに勝てないという諦めはない。目いっぱい地域の価値を主張し活動することで、しだいに多くの賛同者を得ていった。結果として有名になったが、本人たちがなりたくてなったことではない。ただ、地域を思う一念が行動に移らせた。自己顕示欲の

強い人では、こんな運動は割が合わないし、人々をまとめ継続させてゆくことはできなかったろう。

地域を動かすのは経済の視点が大きいが、儲けの論理だけで動くのでは、中心都市は画一的で個性は薄れ、魅力を失い、大都市に勝てるはずはない。経済論理の偏重は、金をつぎ込んでも地域のエントロピーを増加させ、かえって活力を失わせる。これにたいしてエントロピーを減少させるのが人間の力だ。このような人間の力が働かないと、経済の波の中に飲み込まれてしまう。

宮崎県の綾町では、国が天然の照葉樹林の伐採をしようとしたときに、郷田實町長が町をあげて反対し阻止した。それがまちの活性化の始まりになった。三春の伊藤寛町長は、就任早々まず自由民権記念館を建て、自分たちの町の歴史を誇りとして受け止めることから始めた。水戸の佐川一信市長は、世界一流の水戸芸術館をつくり、その運営が継続されるシステムをつくった。これは市民に町の個性を確認させ、誇りをもたせ、長い目で見て町を活性化させている。

愛媛県双海町の職員若松進一は、町の無人駅を使って夕日のコンサートを企画した。夕日は景気が悪いと没になったが、仲間をボランティアで集めて成功させ、いまや双海は「夕日の立ち止まる町」と言われている。長野県の小布施町は、小布施堂の市村次夫が東京から故郷へ帰り、町への思いを自分の店の改修で実践し、それを拠点に周辺を巻き込み、継続的なイベントも成功させた。

いま、多くの中小都市が活力と個性を失っている。地方の活性化には、時の流れだけに流されない理念と実行力をもった人々の存在が欠かせない。地域の論理をもち、多くの人々を地域づくりに目を向けさせ、まちづくりを実践できるのは人の力だ。施策や資金だけでなく、人々が地域に誇りを持つことが肝心だ。

リーダーがいないという声を聞くが、人材は各地域には必ず存在する。まず、地域自治体を市民の政府として機能させるには、選挙によって優れた人物を押し出すことだ。また、市民のなかには、有能な人が隠れている。その人々にチャンスを与え、足を引っ張ることなく、活動の場を提供するのが重要だ。これには、地域全体の人的レベルを上げることが先決になる。子供から始まり、人々の地域への関心と愛情を育てる継続的な学習を続けることが求められる。

地方中小都市における人的資源活性化の可能性

福島学院大学　学長　**下平尾 勲** 氏

元千葉大学　教授
現NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事　**延藤 安弘** 氏

（司会）日本政策投資銀行 地域政策研究センター　室長　**増田　真作**

2004年1月8日　日本政策投資銀行 本店

司会　地域においては、行政、市民・住民、企業、学校といったセクターが組織力を高める方法として、人材を育成するとか、発掘、確保するとか、あるいはリーダーシップを発揮させるような仕組みを作るといったことが求められています。

本日は、「地方中小都市における人的資源活性化の可能性」と題して、人口10万人ぐらいの都市規模で、県の2番手、3番手ぐらいのポジションにある都市を想定しながら、座談の中でこのことに関して両先生に論証していただきたいと思います。

何故人口10万人ぐらいのスケールの都市を想定したかというと、これぐらいのスケールの都市がいちばん広域的な影響力を持っており、またいちばん深刻な悩みを抱えているのではないかと思うからです。

まず下平尾先生から、そのような都市の特徴や現状を整理していただき、その上でそれらの地域の活性化の必要性を論じていただきたいと思います。

下平尾　最近の10数年間における過疎化は農山村ばかりでなく、人口8万人以下の地方の中小零細都市で一挙に進んでいます。働く場所の不足と大学等への進学のために若年層の流出が目立っています。地域産業の基盤をなす農林漁業、地場産業、建設業、商業の不振が過疎化に拍車をかけています。今日では、人口10万人前後の都市で、成長しつつある都市と衰退傾向を示している都市との格差が非常に大きくなってきたと思います。

人口10万人規模の都市がこれまでどうして伸びてきたかというと、第1に高速交通体系が整備され、都市に人口、所得が集中したからです。第2に、地元産品を大都市に販売することができたことです。そして第3に、土木建設業が大きなウェイトを占めていたことです。

しかし一方で、地域を支えてきた地場の産業が結局、中国、アジアとの競争の中で衰退しています。また、後継者がいないので高齢化しており、新しい事柄に挑戦していく意欲も薄れています。そのような中、地方に進出してきた企業も、県庁所在地からは撤退しませんが、本当に企業を必要としている地方都市からは撤退していく傾向になっているのではないかと思います。

こうした10万人都市それぞれの状況の把握と衰退の要因を探ることを通じて、地域の活性化に向けてどのような構想や組織を考え、人材を育成していくかということが、現在いちばん大きな課題になっていると思っています。

人の側面の重要性

司会　延藤先生はご著書の中で「まち育て」をご紹介されていました。そもそも「まち育て」なるものをご説明していただいた上で、人の側面の重要性が実感できるような具体的な事例をぜひお聞かせいただきたいと思います。

延藤　「まちづくり」という言葉は、近年すっかり定着してきましたが、この言葉はもともと地域の内側から豊かさを育んでいく意味をはらんでいました。しかし、この10年、20年の間に行政やあるいは世の中の建築屋が「まちづくり」という言葉を使い過ぎたがために、やや手垢がつき過ぎて、もともとの言葉のニュアンスが陰りを見せています。

「つくる」という言葉は何となくものを効率的につくるという意味に響きがちなので、人もよりよく育ち、町もよりよく育まれていき、人間も町もともに発達していくということで、私はそれを「まち育て」という言葉に託して提起しています。「つくる」とか、「開発」というと、developmentですが、「まち育て」はやはりsustainable developmentです。地域の資源や地域の宝を発見し、磨きをかけ、新しい状況下でそれを経済的成長にも使うし、同時に経済的成長が人間的成長につながっていくという経済的発展と人間的成長が軌を一にするような状況づくりがsustainable development、あるいはsustainable communityです。

具体的にはどんなことを指すかを少し展開します。地方中都市の一つで、私がここ6、7年かかわっている高山市を伝統、風土、歴史といった地域の中核性を持ったまちの典型として引用します。

6、7年前、行政から私に「住宅マスタープラン」作成の依頼があり、市民参加でやるのなら、ということで引き受けました。50人ばかりの公募委員、プラス新しい市民も参加しながら、住宅まちづくり研究会をこしらえ、具体的な活動を始めました。

その中で、まちが元気をなくしている状況にメスを入れて元気にさせていく担い手たちが登場できるような状況づくりが大事ではないか、ということになりました。そして、最初に動き始めたのは子どもグループでした。やはり子どもの視点からまちの元気を呼び覚まそうということで、子どものまち探検を始めました。探検はおのずから感動を呼び、遊び心を誘発し、次から次へと楽しい活動が広がっていきます。「タンケン、ハッケン、ホットケン」という流れが生まれていきました。

第2に、やはり地域では高齢者が非常に多くなっています。高齢者が安心して地域に住み続けられる状況を生み出すために、福祉のグループが生まれました。この福祉のグループはやがて小規模な空き店舗を活用して、「あんき屋さん（あんきに暮らすとは、みんなが機嫌よく暮らすという意味の方言）」という、地域のお年寄りや子どもたちが「まちの縁側」のようにやってこられるような場所づくりを始めました。縁側とは、別に目的的に行くものではなく、あそこに行ったら、だれか面白いおばあちゃんに会えるかもわからないとか、偶発的な出来事が起こる、豊かな出会いの場所でしたが、そうした「まちの縁側」としての「あんき屋さん」が高齢者と子どもの出会いの場所として生まれました。

第3に、高山市といえども、相当の空き店舗が出始めています。しかし、単なる空き店舗活用ではなく、新しい発想、新しい切り口を持つ起業家たちに空き店舗を利用してもらうべく全国に公募しました。第1号では、空いた呉服店にタイプの異なった4つの業種を組み合わせた店をつくりました。2番目もやはり4つのユニークな店の組み合わせです。「ドリーミング事業」と称して、単に行政が支援するだけではなく、空き店舗を活用する企画・運営を市民のいろいろな立場の方々が行っています。

第4に「まち育てコンクール」という運動をやりました。中心市街地の元気を呼び覚ますためのアイデアを市民各層から募り、それを公開審査しました。

第5に、まちを元気にするアイデアコンクールをやる中で、それを行政がすぐさま（といっても、2年後ぐらいな

下平尾　勲 氏　（SHIMOHIRAO　Isao）

1938年大阪府生まれ。
大阪市立大学経済学部卒業、大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了。
佐賀大学経済学部助教授、福島大学経済学部教授を経て、
現在、福島学院大学学長、福島学院短期大学学長、商学博士。
金融論、貨幣論専攻。
福島県総合開発審議会会長など歴任。
主著　「現代の金融と地域経済」（編著、新評論、2003年）
「構造改革下の地域振興－まちおこしと地場産業」（藤原書店、2001年）
「信用制度の経済学」（新評論、1999年）
「現代地域論－地域振興の視点から」（八朔社、1998年）

のですが）実現していきました。空き店舗に子育て支援センター的なものと多世代交流の場所を組み合わせたような、やわらかい「カンカコ館」（鐘の音を表す方言をもじって命名）と称する「まちの縁側」のようなものをつくりました。

「人ありき」、「暮らしありき」の発想から、下からのムーブメントが起こり、それを担う予想外に多様な人々（市民、専門家、行政マン等）が登場し、人が元気に活動するようになりました。こういった地域を内側から元気にしていく活動が、「まち育て」の表れの一コマではないかということです。

地域を活性化させる人のタイプとは

司会　下平尾先生は常々「地域づくりには3つの人種が必要で、それは『若者、よそ者、馬鹿者』だ」ということをよく引き合いに出されますが。

下平尾　私は今、二宮尊徳の本を読んでいますが、彼は「みんなが奮い立っていくのはリストラや節約ではなく、希望と夢だ」、「みんなたくさん食べ、よく働け。一反で米一升多く収穫すれば皆豊かになり夢がわく。夢と工夫だ」といいます。今の状況の中で夢をどうつくるかを考えて、人々がみんなそちらに向かって動いていけば、また次の夢が広がってくるのだといいます。そして夢をつくるために知恵や才覚を生かすというのが二宮尊徳の基本なのです。

もう一つ、17～18世紀の頃のイギリスは今まであるものを加工し、そしてより新しいものをつくり、それに磨きをかけていけばいいと考えていたのです。いきなり新しいものというより、既存のものを生かしていくこと、つまりそこに住んでいる人たちの能力、資源、歴史、環境を生かしていくことを基本にして、みんなが働き、知恵を出し、収入を得て、勝利していけば、地域は活性化できると考えていました。

「地域の発展の王道は足元にあり」と私は思っています。また、「現場に神宿る」とも私はいっています。自分たちの住んでいる現場にやはり解決の条件があるのであって、それを生かすために「よその人」の力を借りてみたり、あるいは情報ネットワークを使ってみたりするのがいいのではないかと思います。延藤さんは人材育成を強調されましたが、延藤さんと全く同じ考え方なのです。

元気な都市というのは、その地域が持っている歴史や風土とか、長年住んでいる方々が自分たちの中で優れているものとか、遊んでいてもったいないものとか、余っているものとか、利用度の低いものをいっそう高めていったと思います。

次に、人材の側面でいえば、情熱のある人が必要だと思います。損得勘定ではなく、行動力のある人です。

それを幾つかのタイプに分けていえば、まずは全体のことをよく理解し指導力のあるリーダーとそれから企画のできる裏方が必要です。

それから何をいわれても「はい、はい」と行動する人です。もっと簡単にいえば、若い人でないと動かないので、「若者」です。

延藤　安弘 氏　（ENDOH　Yasuhiro）

1940年大阪府生まれ。
北海道大学工学部卒業、京都大学大学院工学研究科修了。
熊本大学工学部教授、名城大学工学部教授、千葉大学工学部教授を経て、
現在、NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事、工学博士。
都市住宅計画、生活空間計画専攻。
主著　「子ども・若者の参画－R．ハートの問題提起に応えて」（共著、萌文社、2002年）
「何をめざして生きるんや－人が変わればまちが変わる」（プレジデント社、2001年）
「「まち育て」を育む－対話と協働のデザイン」（東京大学出版会、2001年）
「これからの集合住宅づくり」（共著、晶文社、1995年）

また、よそから来た人を大事にしなければいけません。お嫁さんとか、Uターンで帰ってきた人とか、体の具合を悪くして帰ってきた「よそ者」を財産だと思って、これを生かさないといけません。

そして活動が動き出したら、馬鹿みたいになってやってくれる「馬鹿者」が必要です。

従って、「若者、よそ者、馬鹿者」という「3者（もの）」が必要です。わかりやすいからそういっています。

ただし、やる気のある人だけを育てるのはやはり駄目です。零細企業の人などもみんな一生懸命にやっているのですが、それでもなかなかうまくいきません。ですから、やる気があるかどうかではなく、やはり日本の特質としては、みんなで助け合って、みんなでやっていこうというのがいちばんよいことなのです。

延藤　私も経験的に地域が元気に育っていく過程では、3つのタイプのお世話役が状況の中で育まれていく時にうまくいくと思っています。

お世話役の第1は、「理念派・哲学派」です。危機感を皆で分かち合い、しかしただやたらに煽るだけではなく、それを乗り越えていくにはやはり夢や想像力が必要だということを状況にフィットする言葉で提起できるのは、「理念派・哲学派」だと思います。

しかし、「理念派・哲学派」だけでは事はうまく運びません。先ほど下平尾先生は裏方といわれましたが、私は「実務派」といっています。夢が実現できる道筋として、どこからお金を集めてくるかとか、どういう仕組みをつくっていくかとか、実務的にマネジメントできるお世話役が必要です。

第3のお世話役は「思いやり派」です。いろいろな立場の人が寄ってこられる状況をつくることに心を砕いている人です。みんなが気持ちよく、地域を元気にしていくことに向かえるようにする人を私は「思いやり派」と呼んでいます。日本人にはこの「思いやり派」が結構いるので、そうした「思いやり派」との出会いがすごく大事だと思います。

この3つのタイプはすべて「土の人」ですが、もう一つ、やはり「風の人」がそこに現れてきます。「風の人」はよその地域からやってきて、情報を運んでくる専門家です。この地域は元気をなくしているが、こうしたことをやったら、まだまだやれるのではないかというアドバイスをするとか、やっていることを評価していくといった創造的なコメンテーターの役割をします。この「風の人」と3つのタイプの「土の人」が混じり合う。「風」と「土」が混じり合うと「風土」になります。「風の人」と「土の人」の創造的な出会いが、風土デザイン、新しい地域のデザインが起こっていく仕掛けなのではないかと思います。

主体間の連携について

司会　地域において一つの事業を進めていく時には、市民・住民もいますし、行政の人、産業人、企業人、商売人といわれる人たちもいて、あらゆる人がステークホルダーという形でその事業にかかわりを持ちます。主体間の連携のありようについては、どのように考えればよいでしょうか。

下平尾　地域間の連携にとっていちばんいいのは飲みニュケーションです。酒を飲んでいると、「あそこはあんなことをやっているが、もう少しうまいことをやれないのか」といった話が出ます。延藤さんもそうですが、私も大阪出身ですから、「みんなでおもろいことをやろう」というのが基本なのです。面白いことをやっていると、人は集まってきます。

江戸時代は食べ物がよかったら、ハエが来る。「追っ払っても、追っ払っても、ハエが来る。だから、米櫃を増やせば、地域はよくなる。難しいことはない」と二宮尊徳もいっています。ハエだって、食べ物があるところに来るし、人間だって、面白いところとか、おいしいところへ来るのだから、ちょっと面白いことをやろうというわけです。ですから、地域の場合、最初はやはり飲みニュケーションとか、お互いによく相談するところがあったらいいと思います。「あれをトップに据えて、ちょっとみんなでやろうか」となってくると思いますが、今ではいろいろな階層の人たちの飲み会が非常に少なくなっています。

延藤　私も、楽しさとか、おもろいといったところから始めるのがやはり基本だと思います。

ただ、楽しさも大事ですが、やはり地域には根深い対立の火種もたくさんあります。対立が起こった時には、いい加減な妥協はしないことです。その地域の中で起こりうる対立を力に変え、トラブルがエネルギーに変わっていく場面を通じて、人は変わっていくのです。人が変われば、まちが変わります。人が変わらないことにはまちはよくならないというのは、口でいってもなかなかわかりません。具体の生の経験を分かち合う場面づくりが大切です。実は仕掛ける側が行政であろうとも、企業であろうとも、住民であろうとも、どういう状況でもやはり人が変わるプロセスが大事だと思います。

行政の地域活性化へのかかわり方について

司会　行政部門が地域活性化にどのようにかかわっていくかという論点について、両先生のご意見を拝聴させていただきたいと思います。

下平尾　行政は「効率よく、柔軟に、前向きに」というスローガンになると思います。その時、地元の状況がどうなっているかを調査し、意見を聞きながら、重要な課題を解決すべきだと思います。

自分たちの住んでいる地域では何が優れているか。交通条件がいいのか、技術の蓄積があるのか。人脈が優れているのか、昔からの地域組織がしっかりしているのか。いい果物があるのか、歴史で面白いものがたくさんあるのか、といったものをまず調査していくことになります。そして、そういったものを生かしていくために、行政はもう一つそこに技術を入れるか、市場を入れるか、人材を入れるか、情報を入れるか努力をしてみます。そしてでき上がったものに磨きをかける。そうすると、地域の人は、「それだったら、一つ自分たちもやってみよう」ということになります。ですから、上から与えられた改革というよりも、むしろ内部の人たちの意識を改革するような問題提起を行政の方でやると、行政も非常に信頼されてくると思います。

行政には非常に優秀な人が集まっています。小さい都市や農村に行くと、行政が旗を振らないと他に振る人がいないわけです。地域の中の優れている面を伸ばしていけば、人が集まってきます。従って、行政の問題の立て方自体も、やはり今の時代に応じて柔軟に前向きに持っていくと、住民も行政も一緒に活動できるのではないかと思います。

延藤　行政はやはり黒子であり、住民が主人公になれる状況をつくるべきです。行政は、住民一人ひとりが危機感をつぶやくことができるとか、夢を語り合えるといった自由な発話を紡ぎ出せる場づくりの仕掛け人でありたいということです。

第2にやはり聞く耳を持ち、伝える力を持つことです。聞く耳を持たない専門家とか、聞く耳のない行政マンが結構います。自分のつくった計画や事業の目論見を押しつけてしまうことが多いわけですが、そうではなく、やはり住民が何を望んでいるか、何で悩んでいるかを語れる自由な発話の場をつくるとともに、聞く耳を持つことです。そして、行政は地域からの多様なつぶやきにたゆまず耳を傾け、それを実現していく道筋をつなぎ続けることです。

第3には、やはりつなぐという意味で、「風の人」と「土の人」をつなぎ、「風の人」と「土の人」が出会える仕掛け人でありたいということです。行政マンは縁結びの神になり得た時にその地域はおのずから変わっていけると思います。

市民・NPO等の地域活性化へのかかわり方について

司会　次に市民・住民・NPOという市民セクターの地域づくりへのかかわり方をどう考えるべきか、お聞かせいただきたいと思います。

下平尾　私どもは20年ぐらい前から10年間「福島市の経済と暮らしを考える会」をやってきました。

福島市は今、北海道を除くと5番目に大きな面積を持つ都市です。JR福島駅周辺をどうするか、「福島市の経済と暮らしを考える会」でまちづくりの構想をつくりました。その際、行政マン、大学人、国鉄マン、商業者など意欲的な人たちに参加を呼びかけました。後に町村長や商工会議所会頭になられた人、県職員の若手等、いろいろな人が集まりました。

その時に大切なのは、組織を維持していくための事務局をどうするかです。NPOのいちばんの泣きどころは事務局です。勉強会をやって、年に2、3回みんなの関心のあるテーマでシンポジウムをずっとやっていくわけですが、事務局がありません。当時は生協に事務局をお願いしました。

第2に財源の問題があります。商業者や労働金庫、地元の銀行にもおつきあいだということで出してもらい、大体年間100万円ぐらいのお金を集め、会員も100人ぐらいになりました。

第3に組織をどうするかという問題があります。絶えず動いていないと、人は散っていきますから、定期的に月1回ずつ勉強会を行いました。後に商工会議所の会頭になる大高善兵衛さんとか、坪井孚夫さん等、お元気でアイデア十分の方に出ていただきました。当時はまだ若かったですから、二人とも次々企画に参加して下さり集会を盛り上げて下さいました。企画が面白くパネラーの方の発言にも期待が集まってともかく面白いから、マスコミも注目します。ですから、目標や運動との関連の中で組織をどのように運営するかが重要なのです。

それから、その時々の課題設定をどうするかという問題もあります。あまり早くから計画を立てると、直面する問題に対応できなくなります。当時直面している重要な問題について、市や商工会議所も交えた議論をし、その結果を行政マンがいろいろ工夫して生かしていただきましたが、そういったことに結び付けることができるかどうかということも重要だと思います。

このように自主的な活動を10年間やってきましたが、組織・運動の自立性が大切です。NPOも県の下請機関にならないようにすることが大切です。本来なら県から資金をもらわず、自前でお金も集めてきてやったほうがいいと思いますが、財源問題はなかなか難しいから県から支援を得たとしても、地域の現状に即した自立した運動が求められています。

延藤　地域を元気にする時、市民は人的資源として、4つのリソースフルな役割を持っている存在だと思います。

第1に、地域の宝物を熟知している存在です。地域資源を熟知している存在であっても、無意識のうちに過ごしていることが多いので、やはりあらためて地域の宝物の発見の旅、「タンケン・ハッケン・ホットケン」をやることが必要だと思います。探検すると、子どももそうですし、年寄りもそうですが、これまで気づいていなかったことに気づいたりするわけです。感動の高まりがあります。

第2に市民は感動の表現者です。例えば公共施設の設計であれ、あるいは町のマスタープランづくりの場合であれ、私はいずれも最初にまちの探検から始めます。探検は感動を呼び起こしますが、一方で感動は瞬時に逃げていきます。そこで、「まちの探検をした感動を短歌にしましょう」とか、あるいは子どもたちを相手にする時には「かるたにしよう」といいます。その中で何を目指すのかとか、どういう方向に赴くのかを表現することによって、お互いの方向感やセンスを共有し合っていく。こういった表現者としての市民というのは、やはり専門家、行政、企業ではかなわぬ領域だと思います。表現することを地域のさまざまな活動の流れの中に位置

付けていくことは、21世紀の地域活動の重要な術の一つだと思います。

第3に、ひとたび表現されたものの中からコンセプト、テーマ、主題が浮かび上がってくると、それを実現していくための活動の担い手という存在がいちばん大事になってきます。計画づくりにしろ、あるいはある施設ができた場合でも、それを運用したり、管理したり、育んだり、マネジメントしていくという全部において、やはり地域住民たちの活動の担い手としての自覚や役割が高まっていくことが大事だと思います。

4番目に大事なのは、媒介者として地域住民たちが立ち居振る舞うことができることです。対立が起こった時、やはり地域住民の中から創造的媒介者が必ず現れてきます。やはり地域を内側から元気にしていく流れを紡ぎ出す上では、この創造的媒介者としての住民の役割が非常に重要ではないかと思います。

住民が地域の宝の発見者・熟知者であり、表現者であり、担い手であり、媒介者であると考えるようになるには、市民との付き合いや対話の経験が相当必要だと思います。一定の経験の中で、信頼に値すると住民が思える行政や専門家たちがそこに登場すると、いわゆる市民と行政、あるいは市民と企業と行政のパートナーシップが生まれてきます。本当のパートナーシップに行き着くには、こいつは信頼できるというレベルの意識にお互い高め合うことができるかどうかがポイントだと思います。

企業の地域活性化へのかかわり方について

司会　次に企業セクターに話を移していきます。企業や企業人の振る舞い方、かかわり方についてご意見をいただけますか。

下平尾　福島県には原子力発電所がたくさんあります。企業と地域との共生、共存共栄をいちばん考えているのはやはり電力会社だろうと思います。電力会社は、電気を停電なしに、安定的に、いつでもスイッチを入れれば供給するという社会的責任を与えられています。他方、地域の方は、そこに発電所があるかどうかは二次的な問題であり、この地域をよくしていくためにどうするかを考えています。この場合、企業だけが栄えるとか、地域だけが栄えることは避けなければなりません。

企業が持っている資源には多様なものがあります。広い土地を持っていますから、その土地やグラウンドを地元の人に開放するとか、電力会社であれば、温排水があるので、それを養殖漁業や野菜・花の栽培や地域暖房に使うとか、木材の乾燥に使うとか、熱交換をして、今度はものを冷やすほうにも使えるわけです。また、電力会社の持っている組織や人脈を使って、地元産品のPR等もできます。地域の振興のために、まず何ができるかを考えて行動していけば、立地も進みます。

また銀行と地域の関係についても、地元の商工業者が栄えた結果として、預金や貸出が増えていくという視点に立たないとやはり駄目だろうと思います。誘致企業と地域との関係も相互依存、相互協力の関係の維持が大切です。資材の購入や雇用の拡大などで、企業は地域に対して大きな貢献をいろいろしています。ただ、地方の場合は工場になってしまっているので、企業が黒字であるにもかかわらず、本社の命令一つでバサッとつぶしていくとか、中国に移っていくとかが行われています。地元では誘致企業依存型ではなく、自前で何かつくっていかざるを得なくなっています。

本当に立派な企業もたくさんあります。北海道に岡女堂という江戸時代からの老舗の豆菓子会社があります。ここは神戸であずきを中心にしたお菓子をつくっていましたが、十勝のあずきにこだわって品質の良い商品を生産するために、十勝（本別町）に大きな工場をつくり、神戸市の異人館風の物産館「豆ドーム神戸村」を建設し、自分の持っている絵画（おかめコレクション）や十勝物産の販売なども行い、各旅行会社の観光コースに組込まれ地域観光にも貢献しています。そして、そこでとれる産品を神戸本店の新築の際にもアンテナショップ「十勝村」を設置し、十勝地方の物産の展示販売をしています。十勝でも立派な会社ですし、自分のところも立派なあずきをもらって栄えていましたが、地域と連携している企業もたくさんあります。

延藤　企業には今、遊休地とか、使われなくなった施

設等が結構出てきています。それを自社の営業に活用する流れと、もう一つ地域貢献型の場所につくり換えることによって企業も一定のプロフィットを得るという流れがあります。例えば遊休地を活用してマンションをつくる時でも、足元に「まちの縁側」のようなものをつくるそのプロセスに地域のNPOが間に入って、足元の「まちの縁側」が生き生きと使われるように、人間関係の育みのプロセスをデザインすることが必要となります。ですから、新しい時代の地域と企業のかかわりとして、空間としての地域貢献性とうまく営みを引き出すような地域貢献性という両方に意識的に取り組んでもらえると、お互いに非常に変わっていくのではないかと思います。

もう一つ別の切り口ですが、会社人間のお父さんたちが早い機会に地域人間になるきっかけを見つけていき、そのことを会社も支援するということを通じて、企業と家庭・地域が一つの結び目を具体的に見いだしていくのではないでしょうか。一人の人間がある切り口でしか生きないというのは、ある時代にはそれでもよかったでしょうが、働くことと住まうこと、会社での貢献と地域での貢献という両面がコインの裏表のようにつながっているのが当たり前というライフスタイルが開かれていけば、もう少し地域はましになっていくのではないかと思います。

下平尾　電力会社と地域との共生の例をいくつか挙げますと、宮城県女川では、後継者難で病院が閉鎖され困っていた時、東北電力がその病院の権利を買い取りました。そして総合病院にして、東北大学医学部とネット診療を行って、地域医療の中核になっています。それは電力会社が女川でお世話になっているからです。

それから福島県の浜通りでは漁業が盛んですが高級魚であるヒラメがたくさんとれます。それで電力会社の方で温排水提供し、県が栽培漁業センターをつくり、ヒラメをとった人は売上金額の5％をセンターに支払います。センターでは年間110万尾を育成し、出資額に応じて各漁協に配ります。このように電力会社と県、それから栽培漁業センターと漁協が、一時的にではなく、長期的に地域の産業がずっと栄えるような共生システムをつくっています。

それから電力会社は土地をたくさん持っていますので、ハーブ園を開放しました。おばあちゃんたちが土地を無償で借り受け、ハーブを植えていきましたが、電力会社がハーブの専門家を連れてきたり、ハーブ・サミットを開催したりした結果、女性も、お年寄りも、引退した人もハーブをやり始めて、仲間ができて、非常に健康になりました。ハーブの研究家も出てきて、その人たちは他地域まで教えにいっています。遊んでいる土地を使って、地元の人たちの心をつかむためにどうするかという点で、いいものに使ったと思います。電力会社の地域との共生というと、普通はサッカーのトレーニング・センターばかりが目立ちますが、もっと違う地味な活動もあるのです。

大学の地域活性化へのかかわり方について

司会　最後に大学が地域活性化にどうかかわるかに関して、まさにそのお立場にいらっしゃる方として、いかがでしょうか。

下平尾　大学の場合は2つあると思います。一つは、やはりわが国の先端産業、特にナノテクノロジー、ライフサイエンス、情報通信関係、それから環境、エネルギー等での産業連携です。日本はこれらの部門で国際的に立ち遅れています。米英に追いついていくために、大学の持っている基礎研究を応用研究と結び付けていこうということです。これは昭和62年頃から登場してきた考え方であり、産学連携といわれています。当時、産学連携には反対意見が強かったのですが、東北地方では「インテリジェント・コスモス構想」を早い時期から打ち上げていました。東北7県の産業おこし運動を電力会社が音頭をとって開始しましたが、東北大学の技術を使っては、ということになりました。東北大学以外にも、東北6県の大学を結び合わせてはどうかということになり、東北地域全体の産官学の連携（東北インテリジェント・コスモス構想）が始まりました。工学部の先生方と企業との連携だけでなく、社会・人文科学の先生方も加わりました。

今日では産学連携よりも広くなり産官民学という性格

を持っています。地域連携というのは、地域の抱えている問題について、大学がかかわってはどうかということです。大学の基本はやはり人材育成です。良い卒業生を出して、国家社会に貢献していくことです。そのためには、先生方も、専門研究はもとより、一般教養的な勉強もしなければなりません。これが大学の基本だと思います。

その場合、知的財産を地域に提供し、地域とともに歩む大学が大切です。産官学ではなく、NPO等の「民」を入れるわけです。ですから、私どもは産官民学といっています。いろいろなフォーラムを行う時、民の方にも出ていただこうと考えています。このように時代のニーズは産学連携から地域連携へと変わってきています。そういったことで、大学の先生方が何らかのかかわり方ができるような体制づくりが大切です。

私は福島大学にいる時、地域共同研究センターではなく、地域創造支援センターの設立に協力しました。ちょっと僭越ですが、地域を、ともかく前を向いて進めていくためのセンターだということです。

しかし、大学には大学の独自性があり、企業には利潤追求という問題があります。従って、お互いの立場をはっきりさせ、ここまでなら大学は協力できて、ここまでなら企業は協力できるというように、立場をはっきりさせて、両方とも栄えるシステムをつくらないといけないと思います。基本はやはり信頼です。お互いの誠意・信頼・熱意が基本です。

ただ、連携活動に直接携わるコーディネーターはどこの大学も民間の方に来ていただいていますが、定員法に引っかかって任期が2年というように身分が不安定です。これはやはりもう少しきちんとしないといけないと思っています。地域連携ということが大学における共同研究センターの大きな問題です。

延藤　私は定年3年前に大学を辞めたのですが、在職当時から「地域を学舎にする大学の研究室でありたい」と心がけていました。やっていたのがまちづくりとか、市民参加とか、コミュニティー・デザインですから、いわば工学的なことと社会科学的なことの境界領域みたいなところです。そこで学生・院生たちをすべて地域に放り出し、地域住民たちにもんでもらって、地域住民たちから薫陶を受けさせました。逆に、プロジェクトによっては、地域住民にも大学に来てもらって、地域と大学の両方を行き来しながら、大学と地域が相互に学び合う関係づくりをしていくということも行いましたが、それを通じて若者も育ちます。

理論はやはり現場から生まれるものだと思います。日本の地域社会の内側から新しい理論や手法を構築していく意味では、大学と地域の連携のあり方を、具体のプロジェクトを通して相互に高め合い、相互に連携するという視点を教員が持って臨まないことにはやはり駄目だと思います。学生は放っておいてもなかなかそういうことをしにくいわけですから、教員がやはり地域に若者たちが出向いていけるプロジェクトおこしのチャンス・メーカーとなることが大事です。チャンス・メーカーとしての教員の役割、大学側の役割をやはりもっと広げていく必要があるのではないかと思います。

その時に大事なのは、背中を押してあげる教員側の励ましの姿勢と、若者たちの入り込みを歓迎する地域住民側のもてなしの心だと思います。それが住民側にある時、若者たちは包まれるようにコミュニティーでのさまざまな魅力を呼吸していき、やがてそこで育った若者たちはその地域に貼り付くようになるのです。新しい若者の引きつけ方が地域側にあって、学生たちが地域にやってこられるような状況づくりがまちづくり活動の流れの中にうまく生み出されていくといいなと思います。

地域の自立と人材育成

司会　今までの議論を踏まえ、いわゆる地域の自立に関して、どのようにお考えでしょうか。

下平尾　はじめは希望と夢が大切だと思います。こうしたことをやったら面白いぞといった、夢や感性が最初にあると思います。「こういうのは面白い」などと人にしゃべっているうちにだんだん発展して、それは面白いぞとみんなが手をたたき、それを実際にやり始めると、それは習慣にもなり、やめるわけにいかなくなります。それで、自分一人ではできないから、仲間を連れてきてやるわ

けです。その時の着眼点は、いいものを伸ばすとか、困っているものを解決するということです。

駄目だと100回いってもよくなりません。むしろ、「こんなに面白いことをやっているぞ」といって歩いていけば、自立心を周囲の人がつくってくれる場合があります。自分でやるのではなく、周囲の人が見て、あれは自立しているという評価になるわけです。自分では、自立しているなどとはあまり意識していないものです。

延藤　私は、自立を育むためのキーワードは3つのPと2つのRだと思っています。一つは、今いわれたpoemです。夢を見ることです。2番目はpositive thinkingです。苦を楽に変えるとかいつもpositiveに考えることです。3つ目はpassionです。何を目指すのか、生きる基本をどこに見定めるか。やはり情熱が大事だと思います。

この3つのPが生きていくためには、やはりresponse（応答）が日常的に大事です。いつも問題があると議論し合い、応答を繰り返していくうちに、responseの経験が心の中にresponsibility（責任）をおのずから生み出してくるわけです。responseという自由応答の経験がresponsibilityという責任をおのずから心の中に生み出します。

司会　人材育成、地域が人を育てることに関して、お話しいただきたいと思います。

下平尾　地域に人がいないといわれますが、人はいるのです。リーダーがいないだけです。リーダーを育てるのに、精神的訓話では駄目です。リーダー育成の精神訓話ではなく、やはり具体的な目標を提起し、体制と研修（教育・学習の機会）を整え、そして地域の雰囲気をつくらなければいけないと思います。雰囲気の中で人は育ってきます。今の状況ではやはり駄目なので、何とかしていかなければいけないという共通の意識と、それを解決していくための前向きな姿勢を持つことです。ベースにあるのは心情的に何かやらないといけないという共通の危機意識です。従って、個人個人の努力も大切ですが、全体を動かす制度や体制をつくって、人材育成を行う必要があると思います。

延藤　地域というのは、今日の主題にあるように「人こそ宝」なのです。地域には人という宝が無尽蔵に埋まっており、まだまだ知らない人との出会いがたくさんあります。地域の中では悩ましいことが片方にいっぱいあるが、それを超えて、夢は実現できるのだと思えるようなpositiveな方向感を共有できるのは、やはり人と人との出会いではないか。人と人との出会いのデザインのためにたゆまず創意工夫をし続けることは、地域も人間もともに発達し合っていける過程を紡ぎ出していく大事なポイントだと思います。

高知県赤岡町の商店街が「冬の夏祭り」というイベントをやっています。道の上にこたつがあったり、結婚式がストリートで行われたり、そこでは思いがけない偶発的な面白い出来事が次から次へと起こります。彼らは「『冬の夏祭り』は儲けるためにやるのではなく、人と人の出会いの場を仕掛けるのがのねらいだ」といっています。これなどはそのよい例だと思います。

司会　最後に今後地域政策を考える時に、人の面から、こうした研究や探究をやると世の中の役に立つといったご示唆が何かあればお聞きしたいと思います。

下平尾　人の側面を考えればいちばん大切なのは雇用です。経済の基本はやはり雇用です。二宮尊徳は米櫃だといっています。胃袋を豊かにすれば、そこにハエも集まってきます。ですから、地域の雇用を拡大するために、どんなことが考えられるか。そこのいちばんのベースのところを考えていただきたいと思います。

延藤　新しい状況の到来とともに、やはり地域を内側から元気にしていくための「心的基盤」づくりに新しい金融の役割がありはしないかということです。物的基盤・経済基盤への投資・支援は今後とも必要でしょうが、やはりこれほど地域の人間関係や諸主体間が切れ切れになっている中で、「心的基盤」が必要ではないかと思います。いろいろな人と人の出会いがおのずから自然に起こってくるような「地域の縁側」を構想し、企業や遊休施設や一般の遊休建物等を活用して構築し、営んでいくことです。その「地域の縁側」づくりの必要性と可能性について、少しテーマを見定めて、集中的に調査・検討をしていただくことがあってもいいのではないかと思いました。

司会　長時間のご議論、どうもありがとうございました。